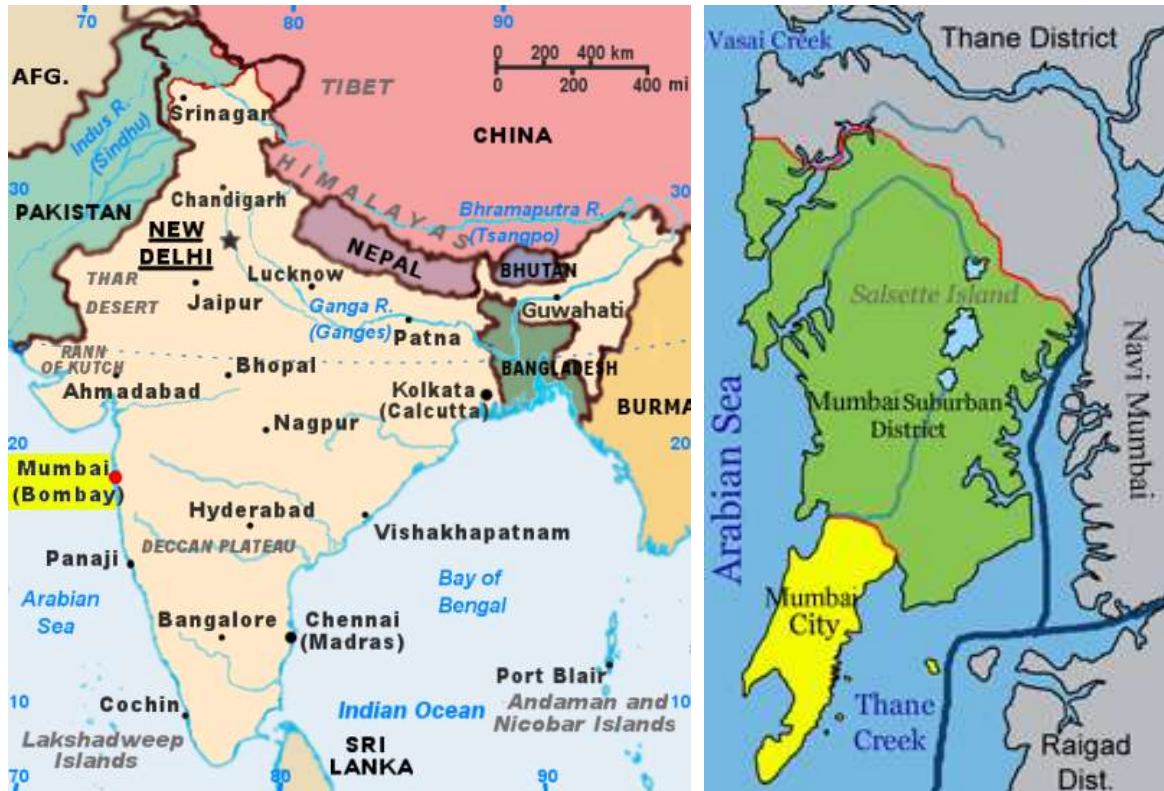


## ムンバイ (ボンベイ) 駐在生活



ムンバイの歴史は古く紀元前までさかのぼり、時代の変遷と共に歴史を経てきましたが、1534年にグジャラート・スルターン朝からこの地域を譲り受けたポルトガルがキリスト教会を建て、ここを「ボンベイ」と呼びました。

この名はポルトガル語「ボン・バイア (良港)」に由来するといわれますが、それ以前からこの地の呼称として使用されていた「ムンバイ」という名は、当時漁民の信仰をみつめていたシヴァ神妃パールヴァティーの異名・ムンバによるとの説があります。

1661年、ポルトガル王女がイギリスのチャールズ2世と結婚する際、ボンベイは持参金としてイギリス側に委譲され、その植民地時代にはボンベイ管区の中核として、さまざまなイギリス風の施設が建設されると共に、イギリスはボンベイに商業拠点を移すことになりました。

1837年にスエズとの間に定期蒸気船航路が開設されるようになり、これによってボンベイはインドの玄関口となり、以降インド最大の貿易港として発展していきました。

1853年にはボンベイと北郊の都市ターナーとの間にインド初の鉄道が開通し、やがてインド全土に張り巡らされた鉄道によってボンベイは貿易港としてますます発展していきました。

1850年代には多くの綿紡績工場も建設され、この地の産業を大きく発展させる中、とくに1861年~1865年のアメリカ南北戦争では、アメリカからイギリスへの綿花輸出が停止したことから、ボンベイの綿織物業は飛躍的に拡大しました。

1869年のスエズ運河開通によって、ボンベイは直接ヨーロッパと結ばれることとなり、ボンベイ港の重要性はさらに高まりました。

ボンベイ財界はカルカッタやマドラス財界と異なり、綿織物工業を基盤としたインド人資本家が多数存在する中、ジャムシェトジー・タタが拠点としたのもボンベイで、1903年にはタタの手によってタージマハル・ホテルが建設され、世界有数の高級ホテルとなりました。

20世紀、二度の世界大戦を通じてボンベイは、1947年のインド独立後もボンベイ州の州都として発展を続けましたが、インド独立に際してはマハトマ・ガンディーらの民族運動の拠点ともなりました。



ムンバイは、インドの西海岸に面するマハラシュトラ州の州都でインド第2の大都市であり、首都デリーと共に南アジアを代表する世界都市の一つです。

1995年、英語での公式名称がボンベイ (Bombay) から、現地マラーティー語での名称にもとづくムンバイ (Mumbai) へと変更されました。

ムンバイの人口は、現在おおよそ2,300万人で国内随一の商業及び娯楽(映画など)の中心都市であり、国際金融においてはアジア有数の金融センターとして、インド準備銀行、ボンベイ証券取引所、インド国立証券取引所といった官民の金融機関をはじめ、多くのインド企業の本社や多国籍企業の主要拠点が置かれています。

ビジネス機会が豊富なムンバイには、より大きな事業機会や比較的高い生活水準を求め国内各地から多くの人が集まり、様々な宗教・文化の集積地ともなっています。

よく整備された海岸通りのマリーン・ドライブから、高級ホテル街のナリマン・ポイント方面を眺め、フォート地区の官庁街を歩いてみれば、ムンバイがいかに活気に満ちた近代都市であるかわかります。一方、旧市街のバザール地区を行けば、人込みと物売り、走り回る荷車や物乞いする子供たち、その混雑ぶりが只事ではないという活気もムンバイの特徴かもしれません。



ゆるやかなカーブを描くバッセイン湾の海岸線に、近代的な高層ビル群が迫る



バッセイン湾に走る湾岸道路マラー・ドライブは、ボンベイ市民お気に入りのプロムナード



ボンベイ湾を望む、インド・サラセン様式の壮麗な旧館



↑新館、タジ・マハール・インターコンチネンタル

↓新館にあるメイン・ロビー。受付は旧館と共通



室内にはガンディーの使った生活用品なども残っている



ガンディーがボンベイ時代の拠点とした家が記念館になっている

マニ・バワンは、ガンディーが最も激しい反英抵抗運動を試みたボンベイ時代の拠点である。彼はこの建物に住み、同志と語り、チョウパティ海岸へ通った。現在、マニ・バワンは、ガンディー記念博物館となっている。たぐさんの蔵書と写真類、そして国産奨励を自ら実践した、綿布のための糸車などが展示してある。ガンディーの生涯をドラマ風にした、人形の部屋もある。



高層ビルのおベロイ・タワーズ



→おベロイ・タワーズのロビー  
←おベロイの吹き抜けのロビー















